

# 児童期の学校外教育活動と社会的スキルの発達に関連

谷内千穂\*・吉澤千夏\*\*

(令和2年11月30日受付；令和2年12月17日受理)

## 要 旨

本研究は、児童期の学校外教育活動（習い事）が大学生の社会的スキルに与える影響について明らかにすることを目的とした。具体的には、大学生自身による児童期の学校外教育活動の振り返りと現在の社会的スキルの評価を行い、その関連について検討した分析の結果、以下のことが明らかになった。

(1) 対象者の9割以上が小学校期に学校外教育活動を経験しているものの、その経験から社会的スキルを獲得したと自覚している者は多くなかった。

(2) 対象者の社会的スキルに関する自己認識は、比較的高かった。

(3) スポーツ活動の経験者は非経験者に比べ、ストレスや感情を処理するスキルが高いと認識していた。また、芸術活動の経験者は非経験者に比べ、計画的で、感情やストレスを処理するスキルが高いと認識していた。芸術活動の中でも、音楽活動の経験者は非経験者に比べ、計画的で、非攻撃的に人とかかわり、感情やストレスを処理するスキルが高いと認識しており、美術活動の経験者は非経験者に比べ、非攻撃的に他者とかわり、自らのミスを受け入れ、謝罪することが出来るとともに、ストレスを処理するスキルが高いと認識していた。

(4) 活動経験数の多い者は少ない者に比べ、初歩的スキル、感情処理のスキル、計画のスキル、ストレスを処理するスキルが高いと認識していた。一方で、活動経験の期間は対象者の自覚している社会的スキルの高低とは関連がみられなかった。

## KEY WORDS

primary school term 児童期, out-of-school educational activities 学校外教育活動, social skills 社会的スキル

## 1. 緒言

社会的スキルはソーシャルスキルとも呼ばれ、「対人関係を円滑にはこぶためのスキル」<sup>(1)</sup>、「人づきあいをうまくするための技術」<sup>(2)</sup>、「他者との関係や相互作用を巧みに行うために、練習して身に付けた技能、もっと簡単に言えば他の人に対する振る舞い方やものの言い方」<sup>(3)</sup>等と定義がなされている。つまり、社会的スキルは「人間関係をよりよくするうえで役立つスキル」であるといえる。もし、社会的スキルの獲得に問題が生じれば、他者とのコミュニケーションの障害を招き、その結果として、例えば学級内での無視や拒否、教室での孤立などを生じさせる<sup>(4)</sup>。このことは、学校におけるいじめや不登校、暴力行為、さらには学業成績とも関連する可能性が指摘されている。子どもの社会的スキルの変容については、家族や家庭、地域社会の在り方の変化、異年齢の遊び集団の消失、少子化等<sup>(5)</sup>に伴い、コミュニケーションの必要性とそれを必要とする場が減少していることが問題であると考えられる。日常生活において社会的スキルを育む場や機会が失われつつある現在、その育成のためには、新たなコミュニケーションを育む場が必要であると考えられる。

コミュニケーションを育む場としては一般に、家庭、地域社会、学校等が挙げられるものの、新たな場の1つとして学校外教育活動が考えられる。学校外教育活動とは、子どもが学校の授業以外で定期的に経験する選択的な学習活動<sup>(6)</sup>を意味し、具体的には、海外留学や自然体験、外遊び、習い事などが含まれる。その中でもいわゆる「習い事」をする子どもは全体の7割以上である<sup>(7)</sup>。学校外教育活動の実情については、活動の種類が変化してきていること<sup>(8)(9)</sup>、活動を始めるきっかけは本人よりも保護者であることが高まっていること<sup>(10)</sup>、活動によって多様な力が身につく可能性が示唆される一方で、活動に対して神経質になると「成果」や「対人関係」の面でマイナスの影響を受けること<sup>(11)(12)</sup>等が明らかにされている。これらは、現代の多くの子どもたちにとって、学校外教育活動が稀な経験ではなく、日々の生活の中で行われている活動であり、さらにその活動が子どもたちに様々な影響を与えうることを示唆

\*上野原市立上野原小学校 \*\*自然・生活教育学系

している。

以上のことから、多くの子どもたちはこれまでの「家庭・地域社会・学校」とは異なる場において、様々な人と出会い、関わることにより、社会的スキルも育まれることが予想される。例えば、習い事を通じてスポーツ活動や文化芸術活動に参加することは「自己表現」「自己制御」「協調」といった社会的スキルを有意に高める<sup>(13)</sup>ことが明らかにされている。さらに、幼児期の造形体験は中学生の記憶に残り、何らかの影響を与えていること、身体的な活動は楽しい思い出となることが多いことを明らかにしている<sup>(14)</sup>。このことから、子どもの頃に経験した学校外教育活動は、社会的スキルの発達に影響を及ぼすと考えられる。

そこで、本研究ではコミュニケーションを育む新たな場として、学校外教育活動の中でも、現在子どもの実施率が高い「習い事」に着目し、その「習い事」と社会的スキルの発達との関連を明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### 2. 1 調査対象

研究対象はN県J大学に在籍する学生198名である。

### 2. 2 調査方法

2017年6月13～20日にweb調査を実施する。

### 2. 3 調査紙の構成

調査紙は、以下の内容で構成されている。

①回答者の属性：性別、年齢

②学校外教育活動の経験について

児童期（小学1～6年生の間）の学校外教育活動の経験の有無及び経験があると回答した者には、その活動内容と活動期間、その活動をしてどんな力がついたと思うか、について自由記述で回答を求める。活動の種類についてはベネッセ総合研究所の「学校外教育活動の分類」<sup>(15)</sup>を採用し、学校外教育を「学習内容」と「学習の場」の違いから大きく4つに分類する。今回の調査では、これらのうち「スポーツ活動」、「芸術活動」、「学習活動（教室学習活動）」（学習塾等）の3つの活動について分析を行う。さらに、「芸術活動」は「音楽活動」と「美術活動」の2つに分類し、分析を行う。「その他の活動」は「海外留学・海外体験・自然体験の有無・希望／外遊び・宿題・テレビの時間」を意味しており、本研究の分析対象からは除外する。調査の際は、対象者にとって理解しやすいように、「学校外教育活動」を「習い事」と言い換えている。

③社会的スキルについて

社会的スキルを捉える尺度として、「kiss-18 (Kikuchi's Social Skill Scale : 18項目)」<sup>(16)(17)</sup>を用いる。回答は「いつもそうだ」を5点、「たいていそうだ」を4点、「どちらともいえない」を3点、「たいていそうでない」を2点、「いつもそうでない」を1点の5件法で求め、その合計点を算出する。得点が高いほど、社会的スキルが高いことを意味する。この尺度は、「若者のための社会的スキル」<sup>(18)</sup>をもとに作成されており、社会的スキルを①初歩的スキル②高度なスキル③感情処理のスキル④攻撃に代わるスキル⑤ストレス処理のスキル⑥計画のスキルに分類している。kiss-18の全18項目は①～⑥の項目に分類される。

## 3. 結果及び考察

### 3. 1 対象者の性別及び年齢

対象者の性別の内訳は男子学生99名（50.0%）、女子学生99名（50.0%）である。また、対象者の平均年齢は19.7歳（SD=2.6）である。

### 3. 2 学校外教育活動の経験及び社会的スキルの様相

#### 3. 2. 1 学校外教育活動の経験

まず、小学生の時の学校外教育活動経験の有無について、「あなたは小学生の時に、学校外教育活動（習い事な

ど)を行っていましたか。」との質問を行う。その結果、「はい」と答えた人が182名(91.9%),「いいえ」と答えた人が16名(8.1%)であり、9割以上の人が小学生の時に学校外教育活動をしていたことが分かる。

次に、経験した学校外教育活動の内容についてみると、スポーツ活動を経験している者が139名(70.2%),芸術活動を経験している者が86名(43.4%),教室学習活動を経験している者が79名(39.9%)である。また、芸術活動を経験している者のうち、音楽活動経験がある者は85名(42.9%),美術活動を経験している者は5名(2.5%)である。このことから、小学校期においては、スポーツ活動を経験している者が最も多く、いわゆる塾のような教室学習活動を経験している者は4割程度であることがわかる。また、芸術活動についても4割以上が経験しているものの、その内容は音楽活動が主であり、美術活動を経験している者は少ないといえる。

さらに「学校外活動(習い事)をしてどんな力がついたと思うか教えてください。」との問いに対し、自由記述による回答を得た結果(表2)、上位5項目をみると、最も多かった力は「体力」(112名, 56.6%)であり、次いで「精神力」と「コミュニケーション能力」(いずれも63名, 31.8%),「集中力」(44名, 22.2%),「忍耐力」(30名, 15.2%)であった。これら上位5つの能力のうち、社会的スキルに該当するのは「コミュニケーション能力」のみである。このことから、学校外教育活動(習い事)を通して社会的スキルが身についたと感じている人は、それほど多くないことが明らかになる。

### 3. 2. 2 社会的スキル

対象者が現在の自分について自覚している社会的スキルを捉えるために、kiss-18(菊池, 1988)への回答を求めた結果を表3に示す。すべての項目の平均値が「どちらともいえない」を示す3.0よりも高いことから、対象者の社会的スキルに対する自己認識は比較的高いといえる。

平均値が最も高いのは「16.何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。(4.22)」であり、次いで「17.まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか。(3.90)」、「3.他人を助けることを、上手にやれますか。(3.79)」の順となっている。一方、平均値が最も低いのは、「11.相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。(3.05)」であり、次いで「7.こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。(3.21)」、「8.気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。(3.29)」の順である。

表1 若者のための社会的スキル (Goldstein et al., (1980) を基に作成)

名称	kiss-18の質問項目
① 初歩的 スキル	「1.他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか。」 「5.知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。」 「15.初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。」
② 高度な スキル	「2.他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。」 「10.他人が話しているところに、気軽に参加できますか。」 「16.何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」
③ 感情処理の スキル	「4.他人が怒っているときに、うまくなだめることができますか。」 「7.こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」 「13.自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。」
④ 攻撃に代わる スキル	「3.他人を助けることを、上手にやれますか。」 「6.まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。」 「8.気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。」
⑤ ストレスを 処理する スキル	「11.気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。」 「14.あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。」 「17.まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか。」
⑥ 計画の スキル	「9.仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか。」 「12.仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。」 「18.仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じない方ですか。」

表2 回答の多かった力の上位5つとカテゴリ化の内訳

N=198 (%)

身についたと思う力 上位5つ	カテゴリ化の内訳	人 (%)
体力	体力, 基礎体力	112 (56.6)
コミュニケーション 能力	コミュニケーション能力, コミュニケーション, コミュニケーション力	63 (31.8)
精神力	精神力, メンタル, 精神統一, 精神力	63 (31.8)
集中力	集中力	44 (22.2)
忍耐力	忍耐力, 忍耐	30 (15.2)

このことから、対象者は他人に謝ったり、他人とうまく溶け込んだり、助けたりするスキルが高いと自覚していると考えられる。また、「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」への回答の平均値は4.22と、18項目のうちで唯一4.0を超えており、他人に謝るというスキルが特に高いと自覚していることが伺える。一方、対象者は、非難を処理したり、おそれを処理したり、和解決したりする、というような、問題を解決する力についてはやや自信がなく、他のスキルに比べ自己評価が低いと考えられる。

表3 社会的スキルの平均値（平均値の高い順）

N=198

項目	$\bar{X}$
16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。	4.22
17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。	3.90
3. 他人を助けることを、上手にやれますか。	3.79
15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。	3.75
9. 仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか。	3.68
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。	3.59
4. 他人が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	3.56
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。	3.56
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。	3.50
1. 他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか。	3.47
5. 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	3.47
18. 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じない方ですか。	3.44
12. 仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。	3.43
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。	3.37
6. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	3.30
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解決できますか。	3.29
7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。	3.21
11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。	3.05

### 3.3 学校外教育活動と社会的スキルの関係

小学校期の学校外教育活動がその後の社会的スキルの獲得とどのように関連するのかを明らかにするために、その活動の内容、経験数（活動の数）、経験期間の視点から、現在の社会的スキルについて分析を行う。なお、学校外教育活動の経験があると回答した者のうち、2名がその内容を記述していないことから、以下の分析からは除外する。

#### 3.3.1 活動の内容と社会的スキルの関係

対象者が経験した学校外教育活動の内容と社会的スキルの関係を明らかにするために、各活動内容の体験の有無により2群に分け、各群の社会的スキルの平均値を求め、t検定による比較を行う。

##### 3.3.1.1 スポーツ活動の有無と社会的スキルの関係

スポーツ活動の「活動あり」群（139名）と「活動なし」群（57名）について、それぞれの社会的スキルの平均値をみると、「活動あり」群、「活動なし」群のいずれも、社会的スキル全18項目の平均値は3.0以上となっている。「活動あり」群において、平均値が最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」

（4.25）であり、次いで「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」

（4.00）、「3. 他人を助けることを、上手にやれますか。」（3.84）である。平均値の最も低かった項目は「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」（3.05）であり、次いで「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」（3.28）、「6. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。」（3.30）である。一方、「活動なし」群の平均値の最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」（4.14）であり、次いで「15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。」（3.73）、「18. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」（3.71）であった。平均値の最も低かった項目は「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」（3.01）であり、次いで「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」（3.03）、「8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解決できますか。」（3.14）である。

次に、スポーツ活動の有無による社会的スキルの特徴を明らかにするため、t検定による両群の比較を行う。その結果、18項目のうち、有意差がみられるのは「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」（「活動あり」群=4.00、「活動なし」群=3.71、 $t(194)=2.135$ ,  $p<.05$ ）の1項目であり、有意傾向がみられるのは、「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」（「活動あり」群=3.28、「活動なし」群=3.01、 $t(194)=1.836$ ,  $p<.10$ ）の1項目である（表3）。それ以外の項目については、両群間に有意な差は認められない。有意差、有意傾向のみみられた項目をみると、いずれも「活動なし」群よりも「活動あり」群の方が平均値が高い。これらはストレスを処理するスキルと感情処理のスキルに該当する（表1）ことから、

スポーツ活動の経験者は非経験者に比べ、ストレスや感情を処理するスキルが高いと認識していると考えられる。

表4 スポーツ「活動あり」群と「活動なし」群の社会的スキルの得点（有意差のみられた項目）  
 $\bar{X}$  (n)

	スポーツ活動あり	スポーツ活動なし	t値
7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。	3.28(139)	3.01(57)	t(194)=1.836, p<.10
17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。	4.00(139)	3.71(57)	t(194)=2.135, p<.05

3. 3. 1. 2 芸術活動の有無と社会的スキルの関係

芸術活動の「活動あり」群（86名）と「活動なし」群（110名）について、それぞれの社会的スキルの平均値をみると、「活動あり」群、「活動なし」群のいずれも、社会的スキル全18項目の平均値は3.0以上となっている。「活動あり」群において、平均値が最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」(4.22)であり、次いで「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」(4.04)、「3. 他人を助けることを、上手にやれますか。」(3.86)であった。平均値の最も低かった項目は「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(3.01)であり、次いで「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」(3.23)「10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。」(3.34)である。一方、「活動なし」群の平均値の最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」(4.14)であり、次いで「6. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」(3.81)、「15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。」(3.80)であった。平均値の最も低かった項目は「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(3.08)であり、次いで「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」(3.18)、「17. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。」(3.20)である。

次に、芸術活動の有無による社会的スキルの特徴を明らかにするため、t検定による両群の比較を行う。その結果、18項目のうち、有意差がみられるのは「4. 他人が怒っているときに、うまくなだめることができますか。」（「活動あり」群=3.72, 「活動なし」群=3.43, t(194)=2.231, p<.05)、「9. 仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか。」（「活動あり」群=3.84, 「活動なし」群=3.56, t(188.4)=2.188, p<.05)の2項目である（表4）。また、有意傾向がみられるのは、「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」（「活動あり」群=4.04, 「活動なし」群=3.81, t(194)=1.893, p<.10)の1項目である。それ以外の項目については、両群間に有意な差は認められない。有意差、有意傾向のみられた項目をみると、いずれも「活動なし」群よりも「活動あり」群の方が平均値が高い。これらはそれぞれ、感情処理のスキル、計画のスキル、ストレスを処理するスキルに該当する（表1）ことから、芸術活動の経験者は非経験者に比べ、計画的で、感情やストレスを処理するスキルが高いと認識していると考えられる。

表5 芸術「活動あり」群と「活動なし」群の社会的スキルの得点（有意差のみられた項目）  
 $\bar{X}$  (n)

	芸術活動あり	芸術活動なし	t値
4. 他人が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	3.72(86)	3.43(110)	t(194)=2.231, p<.05
9. 仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか。	3.84(86)	3.56(110)	t(188.4)=2.188, p<.05
17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。	4.04(86)	3.81(110)	t(194)=1.893, p<.10

さらに、芸術活動の内容を「音楽活動」と「美術活動」に分け、分析を試みる。

3. 3. 1. 2. 1 音楽活動の有無と社会的スキルの関係

音楽活動の「活動あり」群（85名）と「活動なし」群（111名）について、それぞれの社会的スキルの平均値をみると、「活動あり」群、「活動なし」群のいずれも、社会的スキル全18項目の平均値は3.0以上となっている。「活動あり」群の平均値の最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」(4.21)であり、次いで「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」(4.03)、「3. 他人を助けることを、上手にやれますか。」「9. 仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか。」(3.87)であった。平均値の低かった項目は「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(3.02)であり、次いで「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」(3.23)、「10.

他人が話しているところに、気軽に参加できますか。」(3.35)である。一方、「活動なし」群の平均値の最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」

表6 音楽「活動あり」群と「活動なし」群の社会的スキルの得点（有意差のみられた項目）

	音楽活動あり	音楽活動なし	t値
4. 他人が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	3.74(85)	3.42(111)	t(194) = 2.496, p<.05
6. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きて、それを上手に処理できますか。	3.43(85)	3.20(111)	t(194) = 1.666, p<.10
9. 仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。	3.87(85)	3.54(111)	t(188.9) = 2.479, p<.05
17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。	4.03(85)	3.82(111)	t(180.2) = 1.729, p<.10

(4.23)であり、次いで「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」

(3.82), 「15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。」(3.79)であった。平均値の最も低かった項目は「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(3.07)であり、次いで「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」(3.18), 「6. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きて、それを上手に処理できますか。」(3.20)である。

次に、音楽活動の有無による社会的スキルの特徴を明らかにするため、t検定による両群の比較を行う。その結果、18項目のうち、有意差がみられるのは「4. 他人が怒っているときに、うまくなだめることができますか。」(「活動あり」群=3.74, 「活動なし」群=3.42, t(194)=2.496, p<.05), 「9. 仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められますか。」(「活動あり」群=3.87, 「活動なし」群=3.54, t(188.9)=2.479, p<.05)の2項目である(表6)。また、有意傾向がみられるのは、「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」(「活動あり」群=4.04, 「活動なし」群=3.81, t(180.2)=1.893, p<.10), 「6. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きて、それを上手に処理できますか。」(「活動あり」群=3.43, 「活動なし」群=3.20, t(194)=1.666, p<.01)の2項目である。それ以外の項目については、両群間に有意な差は認められない。有意差、有意傾向のみられた項目をみると、いずれも「活動なし」群よりも「活動あり」群の方が平均値が高い。これらはそれぞれ、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、計画のスキル、ストレスを処理するスキルに該当する(表1)ことから、音楽活動の経験者は非経験者に比べ、計画的で、非攻撃的に人とかわり、感情やストレスを処理するスキルが高いと認識していると考えられる。

### 3. 3. 1. 2. 2 美術活動の有無と社会的スキルの関係

美術活動の「活動あり」群(5名)と「活動なし」群(191名)について、それぞれの社会的スキルの平均値をみると、「活動あり」群、「活動なし」群のいずれも、社会的スキル全18項目の平均値は3.0以上となっている。「活動あり」群の平均値の最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」、「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」(4.80)であり、次いで「5. 知らない人とも、すぐに会話が始められますか。」、「8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。」、「10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。」、「13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。」(4.20)であった。平均値の最も低かった項目は「2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。」、「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」、「12. 仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。」(3.00)である。一方、「活動なし」群の平均値の最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」(4.20)であり、次いで「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」(3.89), 「3. 他人を助けることを、上手にやれますか。」(3.79)であった。平均値の最も低かった項目は「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(3.05)であり、次いで「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」(3.19), 「8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。」(3.27)である。

次に、美術活動の有無による社会的スキルの特徴を明らかにするため、t検定による両群の比較を行う。その結果、18項目のうち、有意差がみられるのは「8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。」(「活動あり」群=4.20, 「活動なし」群=3.27, t(194)=2.004, p<.05), 「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」(「活動あり」群=4.80, 「活動なし」群=3.89, t(194)=2.397, p<.05)の2項目である(表7)。また、有意傾向がみられるのは、「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」

「活動あり」群 = 4.80, 「活動なし」群 = 3.20,  $t(194) = 1.669, p < .10$  の1項目である。それ以外の項目については、両群間に有意な差は認められない。有意差、有意傾向のみ

表7 美術「活動あり」群と「活動なし」群の社会的スキルの得点 (有意差のみられた項目)

	音楽活動あり	音楽活動なし	t値
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。	4.20(5)	3.27(191)	$t(194) = 2.004, p < .05$
16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。	4.80(5)	3.20(191)	$t(194) = 1.669, p < .10$
17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていけますか。	4.80(5)	3.89(191)	$t(194) = 2.397, p < .05$

られた項目をみると、いずれも「活動なし」群よりも「活動あり」群の方が平均値が高い。これらはそれぞれ、攻撃に代わるスキル、高度なスキル、ストレスを処理するスキルに該当する(表1)ことから、美術活動の経験者は非経験者に比べ、非攻撃的に他者とかかわり、自らのミスを受け入れ、謝罪することが出来るとともに、ストレスを処理するスキルが高いと認識していると考えられる。

### 3. 3. 1. 3 教室学習活動の有無と社会的スキルの関係

美術活動の「活動あり」群(79名)と「活動なし」群(117名)について、それぞれの社会的スキルの平均値をみると、「活動あり」群の「相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(2.83)を除いて、社会的スキルの平均値は3.0以上となっている。「活動あり」群の平均値の最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」(4.25)であり、次いで「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていけますか。」(3.94), 「15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。」(3.75)であった。平均値の最も低かった項目は「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(2.83), 「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」(3.10), 「8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。」(3.16)である。一方、「活動なし」群の平均値の最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」(4.20)であり、次いで「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていけますか。」(3.89), 「3. 他人を助けることを、上手にやれますか。」(3.84)であった。平均値の最も低かった項目は「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(3.19)であり、次いで「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」(3.27), 「6. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。」(3.36)である。

次に、教室学習活動の有無による社会的スキルの特徴を明らかにするため、t検定による両群の比較を行う。その結果、18項目のうち、有意差がみられるのは「9. 仕事をすると、何をどうやったらよいか決められますか。」(「活動あり」群 = 3.48, 「活動なし」群 = 3.82,  $t(137.4) = 2.498, p < .05$ ), 「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(「活動あり」群 = 2.83, 「活動なし」群 = 3.19,  $t(194) = 2.387, p < .05$ )の2項目である(表8)。また、有意傾向がみられるのは、「4. 他人が怒っているときに、うまくなだめることができますか。」(「活動あり」群 = 3.41, 「活動なし」群 = 3.65,  $t(194) = 1.856, p < .10$ ), 「14. あちこちから矛盾した話が伝わってきて、うまく処理できますか。」(「活動あり」群 = 3.35, 「活動なし」群 = 3.58,  $t(194) = 1.745, p < .10$ )の2項目である。それ以外の項目については、両群間に有意な差は認められない。有意差のみられた項目をみると、いずれも「活動あり」群よりも「活動なし」群の方が有意に平均値が高い。これらはそれぞれ、感情処理のスキル、計画のスキル、ストレスを

表8 教室学習「活動あり」群と「活動なし」群の社会的スキルの得点 (有意差のみられた項目)

	教室学習活動あり	教室学習活動なし	t値
4. 他人が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	3.41(79)	3.65(117)	$t(194) = 1.856, p < .10$
9. 仕事をすると、何をどうやったらよいか決められますか。	3.48(79)	3.82(117)	$t(137.4) = 2.498, p < .05$
11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。	2.83(79)	3.19(117)	$t(194) = 2.387, p < .05$
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきて、うまく処理できますか。	3.35(79)	3.58(117)	$t(194) = 1.745, p < .10$

処理するスキルに該当する(表1)ことから、教室学習活動の経験者は、非経験者に比べ、計画的で、感情やストレスを処理するスキルが高

いと認識していると考えられる。

以上の結果から、教室学習活動を除くすべての学校外教育活動がストレスを処理する力である「17. まわりの人とは違った考えをもっていても、うまくやっていける」の項目について、ポジティブな影響を与えていることが明らかになる。このことは、学校外教育活動が多様な人やモノやコトとの出会い、関わることを可能にしているからであると推測される。一方で教室学習活動においてこの項目との関連がみられないのは、教室で学ぶことが主な活動となり、他者とのかかわりを十分に持つ場とならないことに起因していると考えられる。

### 3. 3. 2 学校外教育活動の経験数と社会的スキルの関係

多様な学校外教育活動は、対象者に様々な経験を提供することになると考えられる。そこで、対象者が経験した学校外教育活動の経験数（活動経験数）と社会的スキルの関係を明らかにするために、学校外教育活動の経験数により2群に分け、各群の社会的スキルの平均値を求め、t検定による比較を行う。まず、対象者が学校外教育活動を経験した数の平均をみると、2.05であった。そこで、活動経験数「2つ以下」群と「3つ以上」群に分け、以下の分析を行う。

活動経験数「2つ以下」群（137名）と「3つ以上」群（59名）について、それぞれの社会的スキルの平均値をみると、「3つ以上」群の「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(2.83)を除いて、社会的スキルの平均値は3.0以上となっている。「2つ以下」群の平均値の最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」(4.21)であり、次いで「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていきますか。」(3.82), 「3. 他人を助けることを、上手にやれますか。」(3.78)であった。平均値の最も低かった項目は「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(3.10), 「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」(3.27), 「6. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。」(3.16)である。一方、「3つ以上」群の平均値の最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」(4.25)であり、次いで「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていきますか。」(4.13), 「3. 他人を助けることを、上手にやれますか。」(3.83)である。平均値の最も低かった項目は「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(2.91)であり、次いで「8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。」「10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。」(いずれも3.32)である。

次に、教室学習活動の経験数による社会的スキルの特徴を明らかにするため、t検定による両群の比較を行う。その結果、18項目のうち、有意差がみられるのは「5. 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。」(「2つ以下」群=3.35, 「3つ以上」群=3.77,  $t(128.4)=1.874$ ,  $p<.05$ ), 「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていきますか。」(「2つ以下」群=3.82, 「3つ以上」群=4.13,  $t(194)=2.395$ ,  $p<.05$ )の2項目である(表9)。また、有意傾向がみられるのは、「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」(「2つ以下」群=3.12, 「3つ以上」群=3.38,  $t(194)=1.874$ ,  $p<.01$ ), 「12. 仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。」(「2つ以下」群=3.37, 「3つ以上」群=3.61,  $t(194)=1.726$ ,  $p<.10$ )の2項目である。それ以外の項目については、両群間に有意な差は認められない。有意差、有意傾向のみられた項目をみると、いずれも「2つ以下」群よりも「3つ以上」群の方が平均値が高い。これらはそれぞれ、初歩的スキル、感情処理のスキル、計画のスキル、ストレスを処理するスキルに該当する(表1)ことから、活動経験数の多い者は、少ない者に比べ、知らない人とでもすぐに会話をすることが出来、計画的で、感情やストレスを処理するスキルが高いと認識していると考えられる。これは、様々な活動を経

表9 活動経験数「2つ以下」群と「3つ以上」群の社会的スキルの得点(有意差のみられた項目)  
 $\bar{X}$  (n)

	活動経験数 2つ以下	活動経験数 3つ以上	tt値
5. 知らない人とでも、 すぐに会話が始められますか。	3.35(137)	3.77(59)	$t(128.4)=2.367$ , $p<.05$
7. こわさや恐ろしさを感じた時に、 それをうまく処理できますか。	3.12(137)	3.38(59)	$t(194)=1.874$ , $p<.10$
12. 仕事の上で、どこに問題があるか すぐに見つけることができますか。	3.37(137)	3.61(59)	$t(194)=1.726$ , $p<.10$
17. まわりの人たちが自分とは違った考えを もっていても、うまくやっていきますか。	3.82(137)	4.13(59)	$t(194)=2.395$ , $p<.05$



験することで、多くの人と関わったり、多くの体験をしたりすることが理由として考えられる。多くの人とのかわり、他人とすぐに会話をするスキルやうまく溶け込むスキルを身に付け、多くの体験から、おそれを処理したり、問題を発見したりするスキルを高めることが示唆される。

### 3. 3. 3 学校外教育活動の経験年数と社会的スキルの関係

長期間にわたる学校外教育活動は、活動経験数同様に、対象者に様々な経験を提供することになると考えられる。そこで、対象者が経験した学校外教育活動の経験年数と社会的スキルの関係を明らかにするために、学校外教育活動の経験年数により2群に分け、各群の社会的スキルの平均値を求め、t検定による比較を行う。まず、対象者が学校外教育活動を経験した年数の平均をみると、4.85年であった。そこで、活動年数「4年以下」群と「5年以上」群に分け、以下の分析を行う。

活動経験数「4年以下」群(56名)と「5年以上」群(140名)について、それぞれの社会的スキルの平均値をみると、「5年以上」群「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(2.05)を除いて、社会的スキルの平均値は3.0以上となっている。「4年以下」群の平均値の最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」(4.23)であり、次いで「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」(3.78), 「3. 他人を助けることを、上手にやれますか。」(3.75)であった。平均値の最も低かった項目は「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」

(3.01), 「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」(3.21), 「6. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。」(3.25)である。一方、「5年以上」群の平均値の最も高かった項目は「16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。」(4.22)であり、次いで「17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。」(3.94), 「3. 他人を助けることを、上手にやれますか。」(3.81)である。平均値の最も低かった項目は「11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。」(2.05)であり、次いで「7. こわさや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」(3.19), 「8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。」(3.27)である。

次に、教室外学習活動の経験年数による社会的スキルの特徴を明らかにするため、t検定による両群の比較を行う。その結果、18項目のいずれにおいても有意差はみられない。このことから、学校外教育活動を実施する期間の長短は、社会的スキルの発達と関連しないことが明らかになる。

以上のことから、社会的スキルの発達に関しては、学校外教育活動の経験期間よりも、経験数の方が重要な意味を持つことが示唆される。また、経験する学校教育活動の内容により、獲得される社会的スキルに相違があることから、児童期の学校外教育活動を検討する際には、経験の多様性に重きを置くことにより、様々な社会的スキルを獲得する機会を提供することになることが示唆される。

## 4. おわりに

本研究は、児童期の学校外教育活動(習い事)が大学生の社会的スキルに与える影響について明らかにすることを目的とし、大学生自身による児童期の学校外教育活動の振り返りと現在の社会的スキルの評価を行い、その関連について検討したものである。分析の結果から、学校外教育活動の経験は、その活動の種類によって違いはあるものの、概してその後の社会的スキルの発達にポジティブな影響を与えていることが明らかになった。また、経験した学校外教育活動の多さが社会的スキルの発達を助長する一方で、経験期間による違いはみられなかったことから、社会的スキルの発達においては、その経験年数よりも経験の豊富さの方が、重要な意味を持つことが示唆された。そこで今後は、学校外教育活動のどのような側面が、子どもの社会的スキルの発達に寄与しているのかについて、より詳細な分析を行い、明らかにすることが必要である。これにより、「技術・家庭」等の「保育」教育・学習等に寄与するデータを提供することが求められる。

さらに、学校外教育活動は義務教育である学校教育とは異なり、家庭環境や社会状況等によりその活動が促進または制限されることになることが想定される。児童期の子どもたちの多様な経験をサポートするための公的、私的な取り組みの推進が望まれる。

なお、本研究の一部は、平成29年度上越教育大学卒業研究（谷内千穂）において、発表されている。本研究にご協力くださいました皆さまに心より感謝申し上げます。

### 引用文献

- (1) 菊池章夫（1998）『また／思いやりを科学する』川島書店.
- (2) 小林正幸・相川充（1999）『ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校』国書文化.
- (3) 相川充（2000）『人づきあいの技術—社会的スキルの心理学—』サイエンス社.
- (4) 前掲書（2）
- (5) 前掲書（2）
- (6) ベネッセ教育総合研究所（2009）第1回 学校外教育活動に関する調査.
- (7) 文部科学省（2010）子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告書.
- (8) 関朋昭・川上光博・菅沼淳子（2005）小学生の放課後にける時間の使い方—習い事に関する報告—：苫小牧工業高等専門学校紀要第41号 43-47
- (9) 後藤憲子（2009）子育て家庭の世帯年収の減少と子育ての現状：家族社会学研究21(1), 21-29
- (10) 成田朋子（2013）早期教育のあり方について考える—保育科学生とその保護者への習い事についての回想調査に基づいて—：名古屋柳城短期大学研究紀要第35号 89-103
- (11) 萩原英敏・山内弥子（2002）子どもの時期の習い事に対する青年期の評価 その1 子どもと親の評価の差を中心に：淑徳短期大学研究紀要第41号 43-82
- (12) 萩原英敏（2003）子どもの時期の習い事に対する青年期の評価 その2 習い事別の項目間の関係を中心に（人文・社会科学系）：淑徳短期大学研究紀要第42号 49-65
- (13) 細川陸也・柱敏樹・志澤美保（2016）就学前のスポーツ活動・文化芸術活動と社会的スキルの発達との関連：小児保健研究75(1), 54-62, 2016-01
- (14) 檜英子・小橋暁子（2013）幼児期の造形体験が中学生に及ぼす影響：千葉大学教育学部研究紀要61巻 479-484
- (15) 前掲書（6）
- (16) 菊池章夫（1988）『思いやりを科学する』川島書店.
- (17) 菊池章夫（2007）『社会的スキルを測る：KiSS-18ハンドブック』川島書店.
- (18) Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., and Kline, P. (1980) Skill Streaming the Adolescent : A Structured Learning Approach to Teaching Prosocial Skills. Research Press.

# The relationship between out-of-school educational activities and social skill development during primary school terms

Chiho TANIUCHI\* · Chinatsu YOSHIZAWA\*\*

## ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify the effects of out-of-school educational activities during primary school term on the social skills of college students. Specifically, university students themselves reviewed their out-of-school educational activities during their childhood and evaluated their current social skills and their relation was clarified. The results of the analysis are as follows:

1. More than 90% of the subjects experienced out-of-school educational activities during their elementary school years. However, not many of them were aware that they acquired social skills from those experiences.
2. The self-awareness of social skills for the subjects was relatively high.
3. Those who have experience in sports activities were perceived to be more skilled in handling stress and emotions than those who have not. In addition, those who have experience in the arts are perceived to be more systematic and have better skills in handling emotions and stress than those who have not. Among the people who experiences the arts activities, those who had experience in music activities were perceived to be more deliberate, non-aggressive, and more skilled at relating to others and handling emotions and stress than non-experienced participants. Experienced the fine arts were perceived to be able to relate to others in a non-aggressive manner, accept and apologize for their mistakes, and have better stress management skills than non-experienced artists.
4. Those with more activity experience perceived higher levels of elementary skills, emotion processing skills, planning skills, and stress handling skills than those with less experience. On the other hand, duration of activity experience was not associated with higher or lower perceived social skills of the subjects.

---

\* Uenohara elementary school \*\* Natural and Living Science